

# 文字・表記 (理論・現代)

佐竹秀雄

## 一、はじめに

この「文字・表記(理論・現代)」という標題のもとで対象にするべき研究は決して少なくはない。それに対して、ここに紹介できる分量には限度があり、また筆者の不勉強ゆえに漏らしているものもあると思う。特に漢字教育に関するものは、筆者にはとても必要にして十分な紹介ができないと考え、あえて触れずにおいた。お許し願いたい。

取り上げるにあたっては、重点主義の立場をとり、説明的なものや啓蒙的なものは原則として除くようにした。

なお、これまでの展望号との関連を保つ意味で、今回も、表記と文字(漢字)とに大別して述べることにするが、その前に、筆者が読み得た範囲内での感想をまとめて述べておく。

(1) 表記に関しては、表記のゆれ、特に語表記に関するものが多かった。それに対して、ゆれ以外の問題、たとえば、表記体系など、表記全般にわたっての記述や、句読点・表記符号などの用法、あるいは文章レベルの表記に関する記述・分析は少なかった。

(2) 漢字に関しては、漢字で表記される語との関係から、漢字の機能や意味を考察する研究が多かった。そして、漢字そのものについては、説明的な記述が多く、新たな視点からの分析や研究は見られなかった。

(3) 漢字・表記については、人間の心理・認識の面から分析しようとする研究に、新たな展開の可能性が感じられた。

## 二、表記に関する研究

表記に関する研究には、先にも触れたように、表記のゆれに関するものが多い。

① 国立国語研究所報告75 『現代表記のゆれ』(秀英出版、昭58・3)

② 西谷博信「表記のゆれ(1)——二」とおりの書き方のある語」(NHK 文研月報32—1、昭57・1)

同右「表記のゆれ(2)——同音の漢字による書きかえにみる表記のゆれ」(NHK文研月報32—3、昭57・3)

③ 天沼寧「八頭身・八等身」(大妻国文13、昭57・3)

同右「『独壇場』から『独壇場』へ」(大妻国文14、昭58・3)  
同右「定年・停年」(大妻女子大学文学部紀要14、昭57・3)

同右「釀出・抛出」(大妻女子大学文学部紀要15、昭58・3)

①は、二つの課題に対する調査・研究の報告である。課題の第一は、表記のゆれや誤用が、どのような語に現れどのような類型があるか、ということである。これについては、問題のある語を分類・整理し、新聞・広報紙における実例を収集し分析している。課題の第二は、ゆれの要因の分析と、それが表記主体の表記意識とどのように関連するか、ということである。これについては、質問紙法による表記調査を行い、個人における意識や態度のゆれを分析している。なお、付表として、新聞の表記においてゆれのあった語の一覧表が示されており、資料的に価値がある。

②のうち、(1)の方は、「年配・年輩」「付属・附属」「何歳・何才」など二通りの漢字表記のある語について、各種の用字用語辞典ではどのように扱われているかの異同の報告である。(2)の方は、国語審議会報告「同音の漢字による書きかえ」をもとに、各種の用字用語辞典で、それらがどの範囲に適用されているかの分析である。たとえば、審議会の報告には「臆説↓憶説、臆測↓憶測」が示されている。これに対して報告に示されていない「臆病↓憶病」という書きかえが各種辞典でどの程度なされているかという問題を扱っている。

③は、いずれも表記にゆれが見られる語を取り上げたもので、それぞれのゆれの実態や原因・理由などについて詳しく考証したものである。

これらの表記のゆれの研究によって、個々の語におけるゆれの状況は明らかにされつつある。今後は、①で部分的に試みられているような、ゆれの全体像を解明しようとするのが重要なテーマとな

ろう。

ゆれ以外についての表記の問題を取り上げたものとしては、次のものをあげることができる。

④金子尚一「必要な読点についての用例(上)・(下)」『教育国語』

69・74、昭57・6、昭58・9)

⑤佐竹秀雄「各種文章の字種比率」(国研報告71『研究報告集3』秀

英出版、昭57・3)

④は、実際の読点の用例からその読点がなくてはならない場合を採集し、読点もつ意味を分類・整理して、読点の用法と問題点を記述したものである。すべての読点の用法を分類するのではなく、「必要な」という視点を持ちこんだために、調査方法の点では、主観が混入する危険が高い。しかし、読点の研究が十分でない現産、こうしたやり方も一つの方法であろう。

⑤は、雑誌の記事の内容と、字種比率の相関関係を分析したものである。字種比率の分布パターンが記事の種類によって異なること、および、漢字含有率の比較的高い文章では漢字と平仮名に補完性が認められるのに対して、漢字含有率の低い文章では漢字と片仮名に補完性が見られることを述べている。

以上のほか、表記の問題であると同時に国語問題にかかわりの深い論として、次の二点をあげておく。

⑥丸谷才一「言葉と文字と精神と」(日本語の世界16『国語改革を批判する』中央公論社、昭58・5)

⑦高橋太郎「事実と歴史と文字論と」『教育国語』75、昭58・12)

⑥は国語改革を批判する論考を集めたもの一つで、主としてかなづかいを取り上げ、新かなづかいを批判した文章である。⑦は、

⑥に対して、「事実のとらえかたと、歴史のみかたと、文字論のすめかたの点でのあやまりを指摘する」という立場から批判したものであり、具体例を踏まえた精密な論が展開されている。

### 三、漢字に関する研究

まず、表記を通して漢字の役割や意味の問題を考えようとするものを取り上げる。

⑧森岡健二「明治期における漢字の役割」『言語生活』378、昭58・

6)

⑨武部良明「新旧漢字・漢語の意味の異同——同音の漢字による書きかえをめぐって——」『木村宗男先生記念論文集』早稲田大学語学教育

研究所、昭57・8)

⑩吉村弓子「現代日本語における漢字の表意性」『言語学論叢』

1、昭57・4)

⑪は、明治期における表記の二つのタイプ、語基分解方式の表記と宛字式の表記とを分析して、それぞれにおける漢字の役割について考察したものである。

⑫は、先の②の「表記のゆれ(2)」と同様、「坐↓座」「掩護↓援護」のような同音の漢字による書きかえの問題を扱ったものである。ただし、こちらはそうした書きかえによって、漢字や漢語の意味が拡大されているか否かという点に主眼がある。この研究の結果は、漢字・漢語の教育・指導に生かされるだろう。

⑬は、漢字表記の代わりに片仮名表記が用いられている場合の分析を通して、漢字の表意性の退行を証明しようとするものである。新聞や雑誌を対象に、漢字を代行する片仮名表記を採集し、片仮名

が用いられた理由を分類・分析している。

次に、漢字の造語機能の問題を扱ったものとしては、以下のものがあつた。

⑭日向敏彦「機能別漢字表——造語力の考察から——」(講座日本語学6

『現代表記の史的対照』明治書院、昭57・5)

同右「動詞性漢字の造語機能」『上智大学国文学論集』15、昭57・

1)

同右「名詞性漢字の概念の層と機能」『上智大学国文学論集』16、

昭58・1)

⑮岩田麻里「現代日本語における漢字の機能」『日本語の世界16』『国語改革を批判する』中央公論社、昭58・5)

⑯の最初にあげたものは、漢字を造語機能別に分類し、常用漢字表の漢字と表外漢字との比較を通して、造語力の高い漢字の特質を明らかにしようとしたものである。そして二番目の「動詞性……」は、分類した漢字のうちの動詞性の漢字について、それが二字漢語の中で、意味的、構造的にどのような役目を果たしているかを考察したものである。また三番目の「名詞性……」は、同様に分類したうちの名詞性の漢字について、概念と造語力、表記力(和語の合成語を表記する働き)の関係を考察したものである。類概念や抽象概念といった上位概念を表す漢字は造語力や表記力が強く、逆に造語力の弱い漢字には低位概念を表す漢字が多いことを指摘している。

⑰は、漢語の類義語群とそれらに共通する意味を表す和語とを対比させ、それらの間のズレを考察することによって、造語の際に果たす漢字の機能を明らかにしようとするものである。この論文では、漢字にはいくつかの意味が内蔵されていて、単語を構成する際

に、結合する相手に応じて、その意味のいずれかが結びつくとの主張がなされている。

⑪は造語法における漢字の機能を個々の漢字について記述しようとする立場であり、⑫は漢字の造語機能に対する一つの考え方を提示したものである。漢字を造語法との関係においてとらえようとする考え方は、漢字研究の基本的なものである。それだけに、さまざまな視点からの研究がなされ、かつ論議が盛り上がることを期待したい。

以上の研究が言語体系内での漢字の問題を扱ったものであるのに対し、次に掲げるのは、漢字というものを人間がいかに感じ、認識しているかという面からの研究である。

⑬ 林四郎 「二字漢語各字の勢力と意味論上の問題」『文芸言語研究・言語篇』7、昭57・12)

⑭ 海保博之・野村幸正 『漢字情報処理の心理学』(教育出版、昭58・5)

⑮ 斎藤洋典 「漢字の読みに関する情報処理過程」『児童心理学の進歩』、金子書房、一九八二版、昭57・6)

⑯ 森木博 「Semantic Differential」法による漢字の分析」『計量国語学』14—3、昭58・12)

⑰は、二字漢語において、構成要素である片方の漢字が意味の上で強い力を持っていて、もう一方の字の分まで代表してしまっているものがあることを、調査によって裏づけようとしたものである。

具体的には、百語の二字漢語を提示し、それぞれについて、二字のうちどちらが印象が強いか、また、二字の組合せの強さの印象はどうか、を質問する。その結果をもとに、語構成タイプと被験者の

受入れ印象の型との関係を分析している。

⑱は、情報理論的なアプローチによって、漢字が保有する多様な情報が人間の中でどのように処理されているかを考察したものである。漢字のパターン認識の過程、漢字の読みあるいは意味がわかるまでの処理過程、漢字を書く心的過程、漢字の学習過程などを扱っている。なお、付章には、海保氏が『計量国語学』13—8、昭58・3)に発表した「漢字の諸特性の標準化データの吟味と読み書き成績との関係」も収められている。

⑲は、⑳と同様に情報処理の概念的な枠組みを出発点とするものである。漢字の構成要素である形・音・義の三要素の特徴が、漢字の読みにおいてどのように関連しているかを考察している。

㉑は、形声文字において偏として用いられる部首の機能を、S D法を使って分析したものである。この論文では、特定の部首をもった人工の漢字(たとえば、「石偏に男」や「火偏に女」)を用いて、実験している。それによって、部首が人工漢字において、形容詞としての機能をもつことを明らかにしている。

㉒から㉔のような研究は、従来、心理学者を中心に行われてきたが、国語学者ももっと積極的に取り組む価値のある分野だと思う。

以上に述べてきた研究のほか、現代の漢字の問題に言及しているものもいくつかあったが、いずれも解說的・啓蒙的な立場からの著述であったので、一つ一つを取り上げることはせず、主なものの書名だけをあげておく。

㉕ 文化庁 『漢字』(ことば)シリーズ16、昭57・3)

㉖ 藤堂明保 『漢字の過去と未来』(岩波書店、昭57・9)

㉗ 鈴木修次 『漢字再発見』(PHP研究所、昭58・2)

また、史的研究の方で取り上げられると思われるが、現代の漢字や表記の問題と密接に関連しているものとして、

②講座日本語学6『現代表記の史的対照』(明治書院、昭57・5)

があった。これは、所収の池上頼造「表記の歴史から見た現代語表記法」に代表されるように、歴史的事実をみつめなおすことによつて、現代表記をとらえようとするものである。通時的研究と共時的研究の接点となるもので、現代の文字・表記を考える上でも意義深い。

#### 四、おわりに

今後の研究の方向について二つのことを述べておきたい。

第一に、これからは情報処理、あるいは機械処理といった方面についての研究が増大するだろう。こうしたことについてすでに言及しているものとして、

③野村雅昭「漢字の現在」(『言語生活』378、昭58・6)

がある。ここでは、ワードプロセッサ(略称ワープロ)の問題のほか、漢字の字体の規格の解説と問題点が述べられている。

今後の文字・表記の研究にとつて、現在話題となっているワープロの存在は、かなり影響力が大きいと思われる。その理由の一つは、ワープロの普及によつて、人間の言語生活の文字や表記にかかわる部分が影響を受ける可能性があるからである。また、もう一つの理由は、ワープロにおける仮名漢字変換の問題を考えると、正書法・標準表記といった、語表記のあり方が議論的になる可能性が高いからである。

第二に、文字・表記に対する人間の側からの研究が重要になるだ

らう。

現代語における文字・表記の研究には、実際にどのようなように使われているかという実態について分析を加える記述的な側面と、日本語において、文字・表記の体系がどのように形づくられているかの理論づけの側面が必要とされる。後者は当然、前者の研究を土台にして成り立つものであろう。その、土台となる前者の研究は、文字や表記の実態を単なる事実として記述するのではなく、もう一歩踏みこんで、そのような実態を生み出す要因について考慮すべきであると考え。そのためには、人間の言語に対する心理・認識・意識に着目したアプローチが有効であると考える。今後、この方向の研究が進むことを期待したい。

— 国立国語研究所員 —